第２回三の丸尚蔵館の開館準備有識者会議　議事要旨

【日　時】
令和４年１０月１９日（水）１５：００～１７：００

【出席委員（五十音順）】
尾崎正明委員、黒川廣子委員、橋本麻里委員（オンライン）、松原茂委員、
宮崎法子委員（オンライン）

【議事要旨】
各議事について、委員からは主に以下の意見があった。

＜（１）ヒアリング＞
①デジタル技術の活用について
国立情報学研究所　高野明彦名誉教授から、ヒアリング資料１について、以下のような説明があった。

・　デジタルアーカイブの活用で、ミュージアムの変革が期待される。
・　ミュージアムの目指すべき発信は、MLA の壁を越えて、利用者が複層的に情報を掘り下げられるように、モノに付随する解説やテキスト情報だけでなく歴史的に積み重なってきた記録・記憶をいつでも掘り起こせるようにすることであり、それが本物の価値を高めることになる。
・　文化財のデジタルツインの方法により、本物と見まごうばかりのレプリカを作るということも考えられる。それに触れることなど本物に対して許されない行為も認められる。デジタル表現になることで、より面白い想定外の展開も期待される。そういった観点から、展示空間、収蔵品検索、ライブラリー閲覧空間との融合が必要。
・　ミュージアムの外に文化財のデジタル記憶を提供することが役割であり、自館が「何を持っているか」が他の MLA 機関からもわかるという世界が望ましい。
・　昭和 10 年に撮影された法隆寺金堂壁画ガラス原板は、当時の最先端技術で記録したものであるが、現在はその後生まれたデジタル技術で変換され、世界中から細部まで確認できる形で公開されている。今やっている活動が遠い未来のパスになる可能性を意識しながらデジタル化に

取り組んでいく必要がある。

・　三の丸尚蔵館でのデジタル化は、何を対象にどの範囲でデジタル化していくのかについては、なるべく広範囲に検討して欲しい。

・　現在の先端技術とのコラボレーションは、恒常的な設備として取り入れると時間の経過とともに陳腐化して、コンテンツが増えていかないという懸念がある。短期的な話題性・集客性には有効だが、できれば期間を区切って仮設として展開していくことが望ましい。デジタル化＝最先端技術の導入ではないという認識が重要

○　デジタルアーカイブについては、２０～３０年前に美術作品を精細なデジタルアーカイブを作るブームがあったが、いまは活用できていない。単にその時点で最先端のものを取り入れるのではなく、先をみて、長い目で見てずっと活用していけるコンテンツを考えていくべき。

（高野名誉教授）メトロポリタン美術館では、エントランスホールの屋根裏は写真撮影室になっており、つねに２０人くらいの専属カメラマンがカタログ、図録用の画像を撮影し続けている。収蔵品のデジタルアーカイブ化については、そのような専門家の集団を作って育てていくという意識が必要。

○　いわゆる高精細なアーカイブでなくても、全ての収蔵品がデジタル空間で見られる、ということが意義深い。大変な労力のかかる事業であるが、そういった方向性のほうがより後々までデジタル情報を活用できるのではないか。

（高野名誉教授）作品によっては高精細で映すことは効果的で、設備も重要だが長期的にはデータが一番大切。設備に協力し、集客なども担ってくれる第三者にデータ化を委託しても、全て任せてはいけない。自分たちの収蔵品は、設備を変更しても自分たちが主体的に活用できるよう、データに対するオーナーシップを確保することがデジタル時代では大事。

○　ジャパンサーチはこれまでのアーカイブと異なることから、活用の仕方を一般の方に対して積極的に発信していると考えるが、その成果はうまく上がっているのか。

（高野名誉教授）　仕組みは提供している。子供たちが作ったノートを教室内で共有したり発信する仕組みが昨年夏に完成して、使われている。

もう少し身近な、町の記憶等の資料を入れて欲しいという要望が多いの

で今年度は、地域の記憶を取り入れることを積極的に進めている。理解のある市町村は地域のアルバムなどの発信に活いただいている。

○　教育に限らず、文化的なリソースの使い方はこれから開発すべき手法も多い。より多くの人に実際に使ってもらい、事例を積み重ねていく必要がある。アーカイブを作る専門家と一般のユーザーだけでなく、それをつなぐのはメディアであるから、メディアに対して、リソースの意義、使い方について、エデュケーションしていくことが必要ではないか。

①文化観光について

ヒアリング資料２（東京ステーションギャラリー　冨田章館長提出資料）について、事務局から代理で説明があった。

・小さい美術館であること、立地も三の丸尚蔵館の近接地にあることから今回資料を提出いただいている。
・展示室の面積は６００㎡と三の丸尚蔵館よりも小さいが、展示のための壁面積は広い。
・特色のあるテーマ設定をする、ということを館の特徴としている。これが館のキャラクターとなり、固定客が獲得できている。
・広報の重要性について。専任の広報担当を配置し、常に学芸と連携しながら、展覧会の中身も含めたきめ細やかな広報活動を実施。記者発表へのマスコミ参加者も増えている。
・ＳＮＳ発信の有効性について。館による発信だけでなく、インフルエンサーも巻き込んだ複合的な情報発信が非常に有効。
・夜間開館について。金曜日は２０時閉館としている。ただし、当初は毎日２０時閉館で設定していたが、夜間は入館者数が伸び悩み、採算が取れないため、現在のような方針としている。
・地域連携について。2010 年より「６MUSEUMS.TOKYO」を実施。新しいアートスポットを創生するための「ゆるい」連携を行っている。
・多言語化対応について。当初イヤホンガイドを活用していたが、費用の問題、コロナ禍による外国人来館者の伸び悩み等から、中止。現在は英訳スマホの翻訳機能などを活用してもらいながら、英語を基軸として、多言語に対応してもらっている。

○　東京ステーションギャラリーの展覧会は、テーマ・企画の選び方が個性

的。多くの美術館・博物館があるので、三の丸尚蔵館にとっても個性を出していくという観点は参考になるのではないか。

（２）三の丸尚蔵館の運営について

資料１及び資料２について、事務局から説明があった。

① 展示の方向性について

○　Ⅱ期棟が完成した段階まで考えると、他館から文化財を借用した企画展が出来ないわけではない。今後展示面積が広くなる中で、必要であれば、館の収蔵品を補完的に借りてくる、ということはありうると考える。一方、三の丸尚蔵館の立地を考えると、新聞社等との共催展は現実的に難しいのではないか。また、皇室ゆかりの品を収蔵しているという性質を考えると、三の丸尚蔵館の収蔵品と全く関係のない企画展は難しいのではないか。

今後展示面積が広くなる中で、展覧会を企画する中で、必要であれば、館の収蔵品を補完的に借りてくる、ということはありうると考えるが、全く関係のない展示を三の丸尚蔵館でやるということは難しいのではないか。これまでの展覧会を踏襲しながら、必要であれば変えていく、ということを、三の丸尚蔵館の学芸室も含めてよく検討されたほうが良いのではないか。

なお、三の丸尚蔵館が外部で展覧会をする場合にはこの限りではない。

○　新聞社との共催展についていえば、従来も新聞社との連携が実施されているが、今後もこのような枠組みは継続する可能性はあるか。

（事務局）関係者間で、今後の協議が必要であるという段階。

○　館の収蔵品を中心に、展覧会の内容によっては関連する他館の収蔵品も出展する、ということがふさわしいと考えている。収蔵品のジャンルも近代の皇室ゆかりのものと献上品とに分かれるが、それぞれに核となるような作品があるので、それを中心に展示を考えていくのが最も館の特質がよく伝わるのではないか。東京ステーションギャラリーは企画で勝負されているという印象だが、そこと競合するような展示はふさわしくないのではないか。

○　東京国立博物館は、もともと帝室博物館であった。関連作品が東博にもあり、三の丸尚蔵館の作品と並べることで展示の効果がでる例もあるので、そのような展示も発掘していただきたい。

○　近隣との連携、他館から借りてくる、というのは企画の内容がより充実

するので、大いに取り入れていただきたい。一方、東御苑の中に立地するという特殊性があるので、開館日、開館時間に制限があり、マスコミによる大々的な集客がそぐわない面もある。最初から大々的な集客を図るのではなく、段階的に対応するなど、慎重に検討していけば良いのではないか。

② 教育・普及活動について

○　メディアルームは、長辺１３ｍ、短辺９ｍ程度であり、あまり広くない部屋。講演会、ギャラリートークや小ぶりな演奏会などが考えられるか。防音の配慮はされているとのことだが、大きな音を出すと周辺に影響が出る可能性があり、注意が必要。特別な時に特別な企画を、というような場所ではないか。

○　小さなワークショップの会場としては活用できるだろう。

（事務局）映像の投映はするが、講座のような目的だけでなく、休憩スペースとして見流す、聞き流すという活用の仕方も可能。自分たちで機材やコンテンツをコントロールしながら活用していくというイメージを持っている。

○　改修前の三の丸尚蔵館ではギャラリートークなどは実施していなかったと承知。他のお客さんの邪魔になってしまうこともあるので、イヤホンを付けていただいて回る、という方法もある。展示場を離れて、観覧前に講堂でのスライドレクチャーということも有効。

○　県内各市町村の小学校の中から年間３０校程度に来館してもらい、学校との連携事業を継続してやっている館もある。

○　ワークショップを実施するには、水を扱える環境や、机や用具類など備品類の用意が必要になる。地方の美術館などに行くと、ワークショップの実施場所はオープンスペースのようなところだったりする。メディアルームを多目的に使うとなれば、備品類の収蔵場所も必要。

○　どうしても美術館は視覚・見ることに関心が偏るが、視覚障害や聴覚障害など、感覚にハンディキャップを持つような方々が楽しめる、学べるような、視覚以外も考慮した工夫があるとよいのではないか。

○　会員制度を導入する場合、何を期待するのか。一般的な友の会のほかに、企業の会員制度などを作れば、結構会員が集まると思うが、その場合、企業は対価として求めてくるものがあるので、その観点も検討が必要。三の丸尚蔵館の立場も踏まえて検討すべき。

○　何をコンセプトとして会員制度を設計するのか、ということ。珍しい例として、大阪市立自然史博物館では、「第二のオーナーシップ」、 として、大阪の自然に関心のある団体・個人が分厚い支援組織となっており、博物館活動のバックボーンになっている。単発の展覧会がいいものだから見に来る、という関係性だけでなく、心情的なもの含め、深いリレーションシップを織り交ぜながら会員制度をつくることも有効ではないか。

○　近隣美術館との広報連携等は充分に打ち合わせすれば可能であろう。展覧会の企画連携は、長いスパンで計画的に検討する必要がある。三の丸尚蔵館の展覧会にあわせ、各地域で補完しあうようなテーマの展覧会が同時に開催されると、楽しまれるお客さんも多いだろう。近隣の他館との連携という点では、広報などの事務的な面はすぐにできると思うが、展覧会を連携して行うことなどの学芸的な面では時間を要するので、長期的なスパンで取り組んでほしい。

○　美術メディアの担当記者は必ずしも美術を専門としていない。相手が美術専門のジャーナリストだと思って話をしても伝わらない、ということもある。メディアとの懇談会の実施などをとおして、誤解なく情報を渡すために、メディアに対する一方通行な周知だけでなくエデュケーションをすることで情報を適切に発信することが重要。

　ＳＮＳについては、館の規模に拘わらず発信を強化できる。東京国立博物館のＳＮＳはフォロワーが１２．８万人だが、太田記念美術館のＳＮＳは、１８．５万人のフォロワーがおり、展覧会動員数も確実に増えている。ＳＮＳの運用のうまさ、面白さ、インフルエンサーにうまく拾ってもらえるか、という複数の観点で考えていきたい。

○　ＳＮＳも重要だが、口コミも重要。大使館に展覧会の案内を出していて、各国要人の来館も多い館もある。大使など、ハイレベルの人々が関心を持ってくれると、そこから各国内へ口コミが波及していく効果もある。外国要人等へのアプローチは、東御苑の中にある三の丸尚蔵館としてはやりやすいのではないか。

○　広報を効果的に使うことが重要である一方、伝えたかったことが伝わらない、間違った情報が伝わってしまうという点は気を付けていくべき。

③ デジタル技術の活用について

○　２．５次元の舞台装置としてバチカン教皇庁図書館が所蔵する史料の画像を取り入れたことがあり、その橋渡しを行った。ColBase は規約を満た

せば商用利用も認められるなど、使い勝手がいい。もっと一般の方にも使っていただきたいサービスだが、なかなかその良さが伝わっていないと認識。もはや、画像・データについて、少なくとも国立文化財機構の持っている情報についてはオープンソースとする流れだと思う。一般的な広報による周知では限界がある。実際の日常の中に、デジタル技術の活用事例が登場する、という機会が必要。

今までなかったやり方でも使えることや、実際に活用の場を見ていただくことも有効。商用利用可能な画像を活用したグッズを作る美大生のコンペなど主催してもよい。美術館と技術者を繋ぐようなコーディネーションを行う人材が生まれ、活躍できるようになるとよい。

○　現実的に、美術館のスタッフがどのくらいそこに関与するのか。あるいは専従のスタッフを雇用するのか。あるいは、文化財機構で全体としてサポートをしていくという形のほうが、将来性があるのではないか。

○　デジタルコンテンツの充実には労力と時間がかかると思う。少ないスタッフで実施するより、三の丸尚蔵館の外側で、機構全体として進めたほうが現実的ではないか。

○　ColBase などへの接続は、画像・データがそろっているのであればそれほど難しいことではなく、さほど心配することではないと考える。

一方、高精細の複製品を作るというのは費用もかかるため、制作の目的、活用方法をはっきりさせることが必要。複製品アウトリーチ（他館への貸し出し）については、人員も含め、検討が必要。

（事務局）三の丸尚蔵館単独でやっていくのは難しいと承知。文化財活用センターなどと一緒にやっていく、という形がありうる。

④ 文化観光の促進、インバウンド対応について

○　多言語化について、ネイティブであったとしても、作品の解説など込み入った内容は専門知識が必要で誤訳してしまうなどなかなか難しい。本当はクロスチェックまでしないといけない。スマホ翻訳はかなり発達しているので、英語さえ整備出来れば、英語をハブとして複数言語への翻訳もかなり高精度で可能になってきたと考える。複数言語の専門家を雇って管理する場合と天秤にかけて検討を進めてほしい。

○　多言語での対応は労力がかかる。たとえ、英語であっても２、３回、あるいはそれ以上、ネイティブの翻訳者と入念にやりとりし、館内スタッフなど複数の目を通し精度を上げないとわかりやすいものとはならない。

○　英語以外は、ネイティブが訳したものを見ても職員もあっているかわからないという危険要素がある。日本に観光に来る外国人の大半は一定レベルの英語ができると考えられる。基本は英語だと思うので英語は確実にするとよい。

会議閉会に際して、事務局より、次回第３回有識者会議については後日日程調整を行う旨、連絡があった（後日、令和４年１２月５日に開催することとなった）。

（以上）